

「入学した学生を一番のばす」大学に 報道関係者を招き、懇談・交流会開く

「2010年度報道関係者との懇談会」（広報室主催）が6月24日、中央大学駿河台記念館で開かれた。

懇談会は、中央大学の近況、取り組み・将来ビジョンについて報道関係者に広報するとともに、広く情報交換し、親睦を深めようという趣旨で毎年開かれており、この日は招待状を送付した報道関係各社の中から約100人が出席。大学側からは、久野修慈理事長、永井和之総長・学長はじめ常任理事、副学長、各学部長ら約20人が出席し、懇談会と交流会の二部構成で行われた。

第一部の懇談会では、まず久野理事長が挨拶に立ち、「中央大学が創立125周年という節目の年を迎え

られたのは、強い生命力があったからである」と強調。そして、「このグローバル社会で生き抜くためにも学生には強い生命力を身につけて欲しい」と語った。

続いて永井総長・学長が「中央大学のビジョン」についてパワーポイントやビデオを用いて説明。「中央大学は、入学した学生をのばしていきたい」と述べ、そのために「大学1年生の基礎教育の向上」を図っていく考えを示した。

また、基礎教育を通して自分の将来をもう一度見つめ直し、入学した学部・学科の科目にプラスして自分の関心・興味を持ったテーマに応えるために学部を超えた教育の場としてFLPを提供していることを説明

し、学部横断的な教育態勢の意義を強調した。

また、グローバル時代の国際化に遅れをとらない



中央大学のビジョンを説明する永井総長・学長

ために、今年4月から総合政策学部でChallenger's Program（全ての授業を英語で行うプログラム）をスタートさせ、理工学部では学会で通用する語学力の修得にも力を入れていることを説明。また、外国へ留学しやすい環境づくりや、外

国人留学生と日本人学生が混在する教育の場としての国際寮を確保する計画を明らかにし、さらに創立125周年を記念して多摩キャンパスに「21世紀館(仮称)」を建設する計画も紹介した。最後に永井総長・学長は「中央大学は『行動する知性』をもって、これからも突き進んでいきたい」と述べ、説明を締めくくった。

続く質疑応答では、報道関係者から「学生を一番のばす大学にしていきたい」とあったが、どこでその結果をはかるのか? という質問に対し、永井総長・学長は「大学4年間に悔いはないと思ってもらうことが基準である」と語った。

第一部終了後は、会場を移して第二部の交流会が行われ、和やかな雰囲気の中で、報道関係者と大学関係者が歓談、親睦を深めた。
 (学生記者 梶彩夏Ⅱ文学部1年)

留学生と学員との国際交流の集い 約400名が楽しく、賑やかに歓談

中央大学で学ぶ留学生と中大卒業生の学員との国際交流の集いが6月26日、都内のアルカディア市ヶ谷（私学会館）で開かれた。毎年恒例の集いで、迎えて今回は22回。約250名の留学生が参加し、学員と合わせて約400名が和やかに交流した。

TBSアナウンサーの武方直己さん（86年卒）の司会ではじまった集いは、冒頭、遠藤一義実行委員長が開会を宣言。続いて『白門46会』の増田晃次郎支部長が、「『2010白門 友愛・YOU&I』をキャッチフレーズに、参加者一人一人が心を通わせ合って、中大に学んで良かったと思えるような会にしてほしい」と挨拶した。

次に永井和之総長・学長が「中大の新校舎の市ヶ谷田町ビルが見えるすばらしい場所でのような会が開かれ、関係者のみなさまに感謝します」と挨拶したあと、外国人留学生会代表の中国からの留学生、谷澤豊さんが「私は中大に入ってから2年目で、去年もこの会に参加し、先輩たちに出会って勉強になった。心を開いて話し合うことができれば、留学生にとって良いことです」と交流を歓迎する挨拶をした。

来賓が紹介された後、中央大学学員会会長でもある久野修慈理事長が、「お互いに理解して発展していかないといけない。楽しくがんばりましょう」と挨拶し、会場を盛り上げた。

このあと乾杯の音頭で、懇親・懇談・交流の会に移行。広い会場のテーブルには、盛り沢山のさまざまな料理が並び、各国の音楽が流れるなかで、学員が留学生を囲む輪があちこちででき、交流が広がった。

『白門46会』の学員が座長を務める『村松一座』による三味線や踊り、民謡の余興が披露されるなど、会は賑やかに進むうちに、音響機器などの豪華賞品が用意された大抽選会に移ると、会場は大いに盛り上がった。楽しい会も終盤になって、韓国からの留学生、黄太根さんが留学生を代表してお礼の挨拶に立ち、「たっさんの留学生が集まる場を作っていただいて、うれいです」と感謝の言葉を述べた。

最後に、中央大学応援歌に続いて、参加者全員が肩を組んで『惜別の歌』を歌い、会場にひとつの大きな交流の輪ができた。『白門46会』

の半澤勉幹事長の閉会の挨拶で、名残惜しそうに会を閉じた。
（学生記者 野崎みゆき 法学部3年）



賑やかに行われた国際交流の集い



受賞に笑顔があふれる橋本さん（中央）

国際学会議で SILVER AWARD を受賞 理工学研究科博士3年の橋本奈緒美さん

理工学研究科博士後期課程
 応用化学専攻3年の橋本
 奈緒美さん（田中研究室）
 が、6月29日から7月1日

までスイス・エンゲルベル
 グで開かれた学術国際会議
 で SILVER AWARD を受賞
 した。

この賞は国際的な学会での学生賞銀賞に相当する。

受賞した研究は「レーザーアブレーション法由来ナノマーカーのスペーサーによる影響」というタイトルで、DNA二本鎖のうちの1本を金属ナノ粒子に固定するという内容。これを用いれば、固定するDNAの塩基配列と一致するDNAのみを選択的に収集することができる。固定する手法として、橋本さんは留学先のドイツで学んだレーザー技術を用いた。

今回の受賞は留学先で行った研究の成果だ。だが橋本さんは「留学した最初の2、3カ月は研究室のメンバーとのコミュニケーションに苦労した」という。はじめは、メンバーから

の技術的な指示が理解できなくても、後から自分で解決すればよいという考えでしたが、指示とは違うことをしてしまい、相手に不機嫌になられたこともあった。

それで考えを変えた。「分からない事は分かるまで聞くようにしました。ドイツでは日本と違って、黙っていると理解したと思われる」。それから、細かい指示も理解できるようになり、研究をスムーズに進めることができた。

研究室には世界中から同世代の留学生在が来ていた。「同じ年齢なのに、円滑に英語でコミュニケーションをとって、バリバリ研究している。その姿に刺激を受けた」という。

留学中、研究以外にも苦労したエピソードがある。「財布をなくした」のだ。「3週間後に戻って来ましたが、それまでの間は現地得知り

合った日本人に助けられました。この頃が精神的に一番辛い時期でしたが、お陰で研究室内では財布をなくした人として有名になりました」と苦笑いする。

その後はドイツでの生活にも慣れ、研究に取り組みることができた。「半年間の留学でしたがやはり短く、1年はいたかった」と唯一、期間の短さが心残りで、帰国後も研究室のメンバーとは連絡を取り合っている。

橋本さんは大学院卒業後は研究者として生きていく決意でいる。安定した終身雇用ではない、実力が問われる厳しい世界だ。「ドイツへの留学によって日本ではできない経験を積み、辛いこともあったけど、大きく成長できた」という橋本さんは、今回の受賞が大きな自信につながったに違いない。

（学生記者 小室靖明 理工学研究科1年）

「海の紛争と国際裁判」をテーマに 柳井俊二・国際海洋法裁判所判事が講演

元法学部教授で、現在、

国際海洋法裁判所の判事を務められている柳井俊二先生の講演会（法学部主催）が7月13日、多摩キャンパス8号館の教室で行われた。講演テーマは「海の紛争と国際裁判」で、会場となった大教室は将来、国際機関で仕事することを目指す学生をはじめ、国際法に関心のある多くの学生で埋まった。



講演する柳井俊二先生

た。

柳井先生は東大法学部卒業、外務省に入省、条約局長、総合外交政策局長、外務審議官などを歴任後、外務次官に就任、その後、駐米大使を務められた。退官後は本学法学部・法科大学院教授（2002～2007年）として教鞭に立たれ、2005年からは国際海洋法裁判所判事の職にある。

講演は、海の領域国連海

洋法条約と紛争解決手続き国際司法裁判所（ICJ）、国際海洋法裁判所（ITLOS）、仲裁裁判所の共通点と相違点などについて、スクリーンを使って、柳井先生の豊富な体験と事例を交えながら、進められた。まず海の領域について、「私が学生だった頃は内水、領海（3海里）、そして公海の3種類しかなかった」と柳井先生。昔、領海の幅は「大砲で管理できる範囲」として国際慣習法上3海里に定められたという。それが1958年にジュネーブ国連海洋法条約が採択され、内水、領海、接続水域、大陸棚（原則水深200mまで）、公海に海の領域が成文化された。その

際、領海の幅を広げる動きが強くなったものの、具体的な幅が合意できなかったため「漁業紛争などが多発するようになった」。さらに1982年の国連海洋法条約で、内水―領海（12海里）―接続水域（領海から12海里まで）―国際海峡―群島水域―排他的経済水域（基線から200海里）―大陸棚―公海となり、海の領域に対する国家の管轄権が広がった。その外側の深海底とその資源は、「人類の共同の財産」として国際的に管理されることになった。

所（ICJ）、仲裁裁判所だ。裁判所への付託は、原則として紛争当事者間の合意が基本になる。3つの裁判所は、法的に拘束する判決・判断をだすことができることでは共通しているが、相違点もある。例えばICJとITLOSは任期9年の裁判官で構成される常設の司法機関であるのに対し仲裁裁判所は、仲裁人の選任について紛争当事者間の合意を必要とするので、紛争当事国の意向が反映されやすいという長所はあるが、裁判の開始までに時間がかかる。また、仲裁人への謝礼が必要になる。「ICJ、ITLOSは任期が長いので比較的裁判の一貫性が保たれやすい」と柳井先生。

その結果、海洋資源や船舶航行などをめぐる「海の国際紛争が多くなり、今日に至っている」と柳井先生は解説した。

ICJとITLOSの主な違いは、ICJは付託される国際紛争について限定はなく、国際連合の主要な司法機関であるのに対し、

紛争が起き、当事者間の交渉や調停で解決されなかった場合に付託されるのが、国際海洋法裁判所（ITLOS）、国際司法裁判

所（ICJ）、仲裁裁判所だ。裁判所への付託は、原則として紛争当事者間の合意が基本になる。3つの裁判所は、法的に拘束する判決・判断をだすことができることでは共通しているが、相違点もある。例えばICJとITLOSは任期9年の裁判官で構成される常設の司法機関であるのに対し仲裁裁判所は、仲裁人の選任について紛争当事者間の合意を必要とするので、紛争当事国の意向が反映されやすいという長所はあるが、裁判の開始までに時間がかかる。また、仲裁人への謝礼が必要になる。「ICJ、ITLOSは任期が長いので比較的裁判の一貫性が保たれやすい」と柳井先生。



柳井先生の講演会場は学生で埋まった

ITLOSは国連海洋法条約の下で設立された司法機関ではあるが、国連とは独立した司法機関となっている。柳井先生が務められているITLOSは、まったく国籍の違う21人の判事で構成されているという。「なにより文化が

違うことがおもしろいです。宗教もさまざまです。よくみんなでお茶を飲んだり、いっしょに食事をしたりします。しかし、いざ裁判となると全員裁判官の顔になります」と柳井先生は自らの体験を交えて、国際色豊かなITLOSを紹介した。講演では、最後に質問の時間がとられ、柳井先生は学生からの北方領土や東シナ海の資源問題などの質問に、丁寧に答えられていた。(学生記者 豊福三晃 Ⅱ文学部2年)

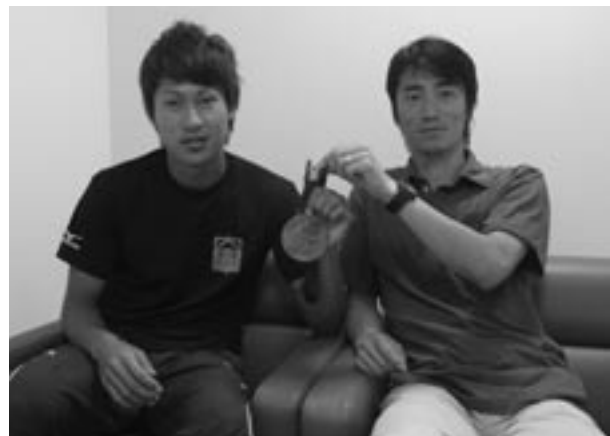
世界ジュニア陸上200mで金メダル 飯塚翔太さん(法1)が日本人初の快挙

陸上競技部の飯塚翔太さん(法学部1年)が、カナダ・モンクトンで開かれた世界ジュニア陸上競技選手権大会(7月19日〜25日)の男子200m決勝で、20秒67

の記録で優勝した。同大会での男子日本人選手の優勝は初めてで、個人種目ではシニアも含めて日本短距離界初の世界一という快挙だ。「重圧を感じることは、

あまりありませんでした。それよりも5月に静岡(国際陸上競技大会)で自己新記録(20秒58)を出せたことで、メダルを視野に入れた意気込みが生まれました

ね。その結果思った通りのレースを展開できました」飯塚さんは、偉業を飾った世界ジュニア陸上をこう振り返る。予選、準決勝とも余裕のレースで突破した飯塚さんは、アジア人として唯一のファイナリストとして臨んだ7月23日の決勝でも2位以下に差をつけ、余裕でゴールを切った。世界ジュニア陸上で日本人初の金メダルに輝いたルーキーに、マスクミがつけた呼称が『和製ボルト』。100m、200mの世界記録保持者であるジャマイカの英雄、ボルト選手の冠がつけられたのだから



小栗監督(右)と金メダルを掲げる飯塚さん

ら、飯塚さんは一躍将来を嘱望されることになった。飯塚さんは、高校3年の頃から、今回の世界ジュニアに照準を合わせた練習計画を立て、練習に取り組んできたという。その甲斐あって、今春の中央大学入学後、様々なタイトルを手中に収めていった。5月3日に行われた静岡国際陸上競技大会の200mで、日

本ジュニア歴代3位、今シーズントップの記録の20秒58で優勝。5月22日の関東インカレ4×100mリレーでは中大のアンカーとして出場し、38秒54の日本学生記録で優勝。翌23日には、200mで優勝した。飯塚さんは6月の日本陸上選手権の参加標準記録を突破していたが、あえて出場を見送り、的を絞っていた世界ジュニア陸上に臨んだのだ。世界ジュニアには、中大から飯塚さんの他に女部田亮さん(法1)、木村淳さん(法1)が出場、中大陸上競技部の小栗忠監督が日本選手団コーチとして派遣された。

自分にしかない能力があるのだから、不利などとは特に思わない」と飯塚さんは力強く語る。勿論、まだまだ課題はある。小栗監督は飯塚さんの課題について、「今の課題は体幹を鍛えることです。体幹が弱いので、今後は腹筋回りの筋力づくりを重点に置いた方がいい」と指摘。「弱点の改善は勿論だけれど、彼には長所を上手く伸ばす形で成長して欲しいと思います。勝負はこれからですね」と期待を寄せている。

飯塚さんが目指すのは2年後のロンドン・オリンピックだ。「来年の8月に世界陸上が行われます。まずはこの大会でオリンピック出場のための標準記録を超えたい」と次の目標に向け、研鑽の毎日が続く。

(学生記者 山下緑 総合政策学部1年)

硬式野球部・澤村拓一さん(商4)が読売巨人軍入団へ

硬式野球部の澤村拓一投手(商学部4年)が10月28日のプロ野球ドラフト会議で、読売巨人軍に1位で指名され、「本当に光栄に思う。心から嬉しいです」と巨人軍入りを表明した。澤村投手は、巨人軍以外には指名されなかったため、入団が事実上確定した。

この日、澤村投手は、多摩キャンパスCスクエアに設けられた記者会見場で、多くの報道陣とチームメイトらが見守る中で、運命の時を待った。待つ間、何度もネクタイに触り、落ち着きがない。緊張で口が渇くのだろう。

水をぐりと飲んだ。午後5時、各球団による1位指名が進み、「読売、澤村投手」のコール。憧れていた意中の球団だ。ちよつと目をつぶり、

目を開けた澤村投手は、小さくにつこり。そして、涙を何度も手でぬぐった。巨人軍以外からの指名がなかったことがわかると、今度は白い歯をのぞかせて、表情を崩した。

肩車される澤村投手



記者会見で澤村投手は、「阿部(慎之助捕手)、亀井(義行外野手)両OBと同じように活躍したい」と早くも巨人軍で活躍することに想いを馳せた。高橋善正監督には「ありがたい」と言葉しかみつからない」と感謝し、希望する背番号を問われ、大学と同じ「18番です」ときつぱり。「二桁勝てるピッチャーになる」と決意を示した澤村投手は、チームメイトに胴上げされ、ようやく笑顔がはじけた。(編集室)

本学と学校法人横浜山手女子学園が合併 中・高・大一貫教育校として再スタート

学校法人中央大学と学校法人横浜山手女子学園が10月1日、法人合併し、同日、横浜市の横浜山手中学・高等学校体育館で合併式が行われた。合併に伴い、中央大学横浜山手中学校・高等学校（今年4月に名称変更済み）は、中央大学の附属学校として再スタートを切った。

合併式には、中央大学から久野修慈理事長、永井和之総長・学長はじめ理事、職員幹部らが出席。横浜山手女子学園からは渡邊順生学園長ら創立者一族、それ

に中学、高校の全生徒、父兄、卒業生らが出席した。君が代斉唱のあと、式辞

に立った久野理事長は、横浜山手女子学園の102年の歴史に触れ、「中央大学



校旗（学園旗）が中央大学（右側）に手渡された

はその伝統を守っていかねればならない。神奈川県一の中学、高校を目標し、それを達成する覚悟です」と挨拶した。

続いて永井総長・学長が、『実地應用の素を養う』という中央大学の建学の精神は社会的課題にこたえる人材を育てることにある、と紹介したうえで、「中大の建学の精神をミックスし

て、自分たちの心の中に素晴らしいものをつくり出していったきたい」などと述べて、合併による同中学・高等学校の発展を祈念した。

このあと創立者一族を代表して渡邊学園長が、「希望に満ちた新しい歩みをはじめることになったことは、大変喜ばしい」と祝辞。中川緑羽杖会（同窓会）会長、前

ら、創立者一族に感謝状が贈呈され、校旗（学園旗）が学園から中央大学に引き継がれ、最後に学園の校歌、中央大学校歌を斉唱して、合併式を閉じた。

合併式終了後、横浜市内のホテルに場所を移して、合併記念祝賀会が盛大に開かれた。（編集室）

富里弘美奨学会（同窓会）会長の来賓挨拶に続き、生徒会会長李楚蕃さんが、「歴史が永遠に続くように努力し、中大の発展にさらに努力をしていくことを誓います」と生徒を代表して誓いの言葉を述べた。

